

加藤 静 夫 君 を 追 想 し て

渡 辺 千 尚

クラーク博士の“Boys, be ambitious!”の遺訓にひかれて、その実北海道の自然の中でカレッジライフを大いにエンジョイしようというのが魂胆だった。私が津軽の海を越えて北大予科に入学したのは大正末期のことであつた。当時予科の恵迪寮では士気を鼓舞すると称して深夜に猛烈な「ストーム」が寝込みを襲つて各部屋に乱入することがしばしばだった。入寮して間もない或る夜、支那そばやのチャラメル伴奏入りの奇抜なストームが現われた。その奏者が実に加藤君で、その時はじめて同君を知つたのだつた。



加藤君はテニス、ホッケー、アイスホッケー、スケート、ピンポンなどのスポーツは勿論のこと、色々な芸事に非凡の腕をみせ、多芸多才であるのに対し、私は北海道の山々を夏も冬もほつつき歩き、無芸大食であるところにまことに面白い対照が見られる。私に大公望の心境を伝授したのも同君である。同君の大学生活は「遊・学」の模式標本みたいなもので、全くよく遊び、よく学んだ。あのすばらしい語学は何時学習するのか、級友間の七不思議の一つに数えられていたのもむべなるかなである。学部に入つて机をならべて昆虫学を専攻するようになってからは私達は益々親密の度を加え、今日に至るまで変らざる交友に終始した。

加藤君はほんとうに親切で友情に厚かつた。卒業後同君は直ちに西ヶ原の農事試験場に入つたが、私が上京する毎に、ふか川のおでん、駒形のどじょうなど、うまくてやすい（オット失礼）店や、また札幌ではとてもできない珍しいゲームなどに案内して私を楽しませた。その後同君が北海道農事試験場に転じて、再び札幌で生活するようになってからは、二人してスキーに釣魚に愉快な日を送ることが多かつた。珍らしく同君は学生時代にはスキーを殆んどやらなかつたが、東京に行つてから俄然スキーに熱をあげ、札幌にもどつてからもスキーだけは私の方が先生だつた。同君が良縁を得たのも「スキーがとりもつ縁かいな」といつたところである。同君ほど北海道が好きで、札幌をこよなく愛し、北海道のよさを知る人はそんなに多くはない。大東亜戦争の起る直前に北京に家庭を移すまでの札幌の牧歌的なおおらかな生活こそ同君にとっては生涯最良の時代ではなかつたろうか。

不思議なことに私達は異境の各地で巡り会い、楽しい日を過ごすことがしばしばだった。今次大戦のさなかに私は興亜院の委嘱により内蒙の農作物の害虫調査におもむいた際も、同君の案内で古都北京の情緒を満喫することができた。また1956年にはロックフェラー財団の好意で、幸運にも二人とも欧米各国を歴訪する機会が与えられた。かつて或る老先生から海

外遊学留学について御高説をうけたまわつたことがある。先生曰く「今の若い人はとかく勉強ばかりして遊びを学ばず、また徒らに猪突猛進して学を留めることを知らないから、よろしく海外に出てこれらのことをよく学んで来るところに意義がある」と。まことに言いえて妙で、海外にまで出て箔をつけてくるなんてくろむものとはとんでもない不心得なこと、私は今もなお老先生のお説を強く支持している。しかし私達はとうに「遊学」「留学」は国内で充分すませてしまっていることだし、唯各国の大学、研究所、自然博物館などを廻つて見聞を広め、またあちらの学者と交流を深めてくればよいのだから呑気なものだつた。相談したわけではなく、唯第10回国際昆虫学会議の開催地“モントリオールで会いましょう”と約束しただけで、各自のスケジュールで勝手に行動したが、各地でしばしば巡り会つた。私が先発だつたので、東京で御夫妻に渋谷のロシア料理で壮行の宴を開いていただき、

THE ORCHESTRAL CONCERTS SOCIETY
present

Sir THOMAS BEECHAM BART
ISAAC STERN

Royal Philharmonic Orchestra
Leader: Arthur Leavins

Sunday, October 14th, at 7.30

Overture, "Fingal's Cave"	Mendelssohn
Symphony No. 4 in B flat	Beethoven
INTERVAL	
Concerto for Violin and Orchestra	Beethoven
Overture, "Die Meistersinger"	Wagner

ロス空港では私が迎え、ワシントンの空港では加藤君が迎え役に廻つた。モントリオールでは大学の学生宿舎に同室して、楽しかつた学生時代の思い出に耽けつた。会議終了後同君はカナディアンロッキー方面へ、私は九大の安松博士と一緒に東部海岸地方へ、別々のエキスカージョンに参加したので、またはなればなれになつた。だが約一ヶ月後にロンドンで再び巡り会つた。ロンドンは名物の霧がそろそろかかる季節であつたが、British Museum (Nat. Hist.) の双翅・膜翅類の研究室で、昔にかえつて机をならべて2週間ばかりを過した。一夜二人して音に聞く音楽の殿堂 Royal Albert Hall で、International celebrity

concert を聴く機会を得た(挿図参照)。ベートーベンのバイオリン協奏曲が余りにもすばらしかつたので、音楽会が終つてから、期せずして二人は公園の森の中をしばし無言でさまよつたことも今やなつかしい思い出となつてしまつた。奇しくも、時あたかも今日よりちようど満6年前のしかも同じく日曜日のことであつた。

終戦後中国の留用時代を経て帰国してからの同君の東京の生活は多忙の一語につきる。農技研の病理昆虫部長の要職についてからは特にその感が深く、はたで見る目も気の毒なほどだつた。しかし持前の気安さから相当余暇を楽しんでいたようだつた。同君は忙にいて学を忘れず、最後の論文になつてしまつた「Taxonomic studies on Soy bean leaf and Stem mining flies (Diptera, Agromyzidae) of economic importance in Japan, with descriptions of three new species」[Bull. nat. Inst. Agr. Sci. (Japan), C (13): 171-206, 1961]は昆虫分類学と応用昆虫学との直結を持論とする同君の面目躍如たるものがある。

加藤君がキリスト教信者であることは知る人ぞ知るで、臭味のないクリスチャンであつ

1962

KONTYŪ

287

た。責任感が強く、清廉潔白、一視同仁、誰にでも親切で、後輩の面倒をよくみた加藤君の人となりに、内に秘めたキリスト教の精神がにじみ出ていることを見逃してはならない。同君は学生の頃から「カレススキ」の愛称で同窓生達に親しまれていたが、決して晩年のあの秋のすすきを思わせるような美事な銀髪を予知して名付けられたのではない。実は寮生活の時代に教室からもどると安バイオリンで、当時一世を風靡した「かれすすき」の歌を先づ一曲かなでるのがならわしだったのが、そもそものことの起りであつた。故人愛唱の讚美歌(404番)と共に、私は故人哀奏のこの悲歌を故人を偲ぶよすがとしたいと思つている。

(1962年10月14日、雪虫の飛び交う札幌にて)

会 報

日本昆虫学会東北支部の活動状況

盛岡地区談話会は1月7日、岩手大学農学部で開催され、本間健平氏(園芸試験場盛岡支場)のモモンクイガの休眠についての講演があつた。参会者 16名。

第10回支部大会は8月4日岩手郡松尾村(十和田、八幡平国立公園)で開催された。4日は山本 弘、岡野磨瑳郎、平野修一3氏による八幡平の昆虫相についての講演があり、5日は八幡平において採集会を行なつた。当日は好天に恵まれ収獲も多かつた。参会者 24名。

日本昆虫学会関東支部活動状況

関東支部第50回例会は昭和37年2月24日、国立科学博物館で開催、講演は次の通り(出席者は39名)。

1. ヒマラヤ採集談・カラースライド供覧……………山田隆保(三共)
2. 沖縄の半翅目について……………長谷川 仁(農技研)

第51回例会は5月12日、国立予防衛生研究所で開催、講演は次の通り(出席者は15名)。

1. ビルマメグイ諸島の昆虫類……………和田連二
2. アオムシコムバチの寄生を受けたモンシロチョウの幼虫体液中にみられる巨細胞の起源について……………北野日出男(教育大)

第52回例会は6月23日、国立科学博物館において開催、講演は次の通り(出席者は26名)。

1. ミクロネシアと小笠原のタマムシ相とその分布について……………黒沢良彦(科博)

第53回例会は採集会を兼ね8月4日・5日の両日、栃木県塩原新湯温泉において開催した。講演は次の通り(参会者は14名)。

1. アブラムシの生態について……………田中 正(宇都宮大)
- 尚本年は当支部において大会を行なうため、支部大会はこれをもつて代えることとした。